

追悼 木佐木哲朗教授

木佐木先生ともっと話したい — 私の追憶 —

山内 健治

木佐木先生は、私の学生時代、その後の人類学研究・教育生活の中で同志であり敬愛する戦友でした。そのことを書くために、40年以上前の記憶から呼びおこさせてください。記憶違いもあるかもしれないがお許しください。

木佐木哲朗氏との出会いは、昭和54年の秋だった。彼は、明治大学政治経済学の4年生で村武ゼミナールに所属していた。同時に彼は明治大学の〈混成合唱団部〉に所属していた。そこは名門サークルであった。当時、私は、学部の一学年上で大学院に入りたてであったが、彼のサークル仲間の中村君を通じて、「友人の木佐木君が大学院を受験したい、ついては受験相談にのってほくれないか」ということで新宿の紀伊国屋書店の裏手にあったトップスという喫茶店で初めて彼に会った。印象は、私も含めてだが、いかにも明治大学の学生らしく服装は、確かジーパンにグレーのトレんチコートであった。大学院に行き人類学をもっと勉強したい情熱に溢れていて圧倒

された。彼が長髪であったこと、私とたいして年齢も違わないのにととても礼儀正しく、時に、はにかむような笑顔が忘れられない。勿論、彼は、翌春、大学院に優秀な成績で合格した。4月頃、当時の彼の指導教授の蒲生先生の研究会で彼に会った時は、ネクタイも締めて凛々しく堂々としていた。彼の同級生は蓼沼さん、菅家さん、執行さんと彼の四人で、前者二人は、家族構造やジェンダー研究、執行さんはスリランカ、木佐木さんは早くからフィリピン研究を開始していた。彼等の入ったおかげで、研究室も海外調査のできる若手に満ちて人類学風になってきていた。

その後、私は、4年、彼は3年で修士論文を提出する。つまり同級生になってしまった。さらに、その後、お互いドクターコース受験で浪人するが、彼が先に合格することになる。少し焦った。学年は、いろいろ入れ替わったが、木佐木先生とは20代からよく語らい飲んでまた談笑した。将来の研究のこと、人生のこと、新宿・渋谷で

いろんな店で終電まで飲み明かした。時に彼の宿先には何度か泊まらせていただいた。いまでも、飲み屋でメモした人類学の討論のことの記憶がよぎる。内容は「人類学と民俗学の違いとは何か」「フィリピンの双系性と鹿児島のとヤウチとの違い?」「国内調査とポントック現地語調査の違い?」「焼酎は何がうまいか」・・・とりとめない日常話も延々としていた。

木佐木先生は研究室に入り蒲生正男・上野和男・村武精一・大胡欽一先生ほか、そうそうたる人類学者に師事していた。どの指導教授も木佐木君の研究姿勢を暖かく見守っていて信頼も得ていた。

学究姿勢が紳士だったことに加え、人間的に謙虚な姿勢だったからだと思う。そしてフィールドワークが好きなのと同時に、人間が好きだった。ポントックの村の話は聞くたびに村人の顔が浮かぶようだった。また、同級、下級生の多くに慕われていた。

あの頃は、木佐木君の歌声を聞く機会に恵まれた。当時の年配の先生方は、研究会の二次会で、よくカラオケを歌っていた時代で、当時の記憶の限りでは、彼は村武先生の年代の好きだった「女の道」「釜山港に帰ろう」など演歌に加え当時の流行歌まで、レパートリー広く歌えた。合唱団に所

属していた彼の歌力、ビブラートのきいた歌は泣かせた。

先に「戦友」と書いたが、そのエピソードには、いわゆるオーバードクターの頃の話が多い。学費も生活も困窮時代である。

記憶の限りでは彼は、調査費用と生活費貯蓄のため競馬レース（馬券購入）を再開していた。彼は根っからの馬好きで競馬新聞を分析するプロだった。アルバイト代わりになったと聞いている。いよいよ、お互い困窮し水道橋にあった「研数学館」という予備校で進路指導のアルバイトを一緒にすることになった。あの頃もよく話、よく駅前の屋台で一杯やって帰宅した。

教員公募を出してはお互い落選して、お互い生活も限界という頃、彼は、新潟へ、僕は札幌に専任職を得ることができた。電話でお互い長話をして祝杯をあげた。

その後の彼の活躍や研究歴は、本文集の中で、森谷裕美子さんが触れられるだろうから、そちらにまかせるとして、ここでは、時を経て、木佐木先生と東京で再開してからの話にしよう。10数年前ほど木佐木先生が明治大学の学部や大学院の講義で東京に週末の金曜日に来られるようになってからだ。彼が、講義を終えるのは、午後の8時頃であった。新潟行き最終バスまでの1時

間、昔のように、また、人生や研究について語らい、ラグタイムが再開した。とても楽しかった。時に彼が宿泊できる時には、昔のように、新宿で飲み明かした。いつの日か、お互いの子供達は大学生になっていた。

木佐木先生のお嬢さんが、東京の大学に進学してアパート生活をするようになると、木佐木先生はお嬢さんの下宿にたまに泊まり話せるようになったことをとても喜んでいて。そんなある日、御茶ノ水の店で、木佐木先生、お嬢さん、そして私の三人で呑みながら話すことができた。お嬢さんは我々の大学院時代の先輩の植野弘子先生に文化人類学を習ったとのこと、大学で混声合唱団に入られているとのこと。何か、とても不思議な時間が流れた。木佐木さんとこの人生で友人になれたことに心から感謝しながら、人生の幸を感じ別れた。

そして、急に大病の話を書くことになる。彼は、迷惑をかけるからと、学部講義の次年度の継続を辞退していたが、大学院だけでも講義を依頼していた。彼の講義は受講生にすこぶる評判がよく、人類学の理論、フィリピンのフィールドの話、特に受講生からは首狩りの習俗の話が漏れ伝わってきた。

彼と最後に会ったのは、2019年の秋だったと思う。明治大学の講師室で、病気の話はあまり触れずに彼と数分話した。帰り際は、いつものように笑顔であった。

木佐木先生の訃報に接した時から、彼が亡くなった感じがしない。また、いつでも話せるように思っている。

ありがとう。木佐木先生、家族を人類学そして人間を愛した君の笑顔や言葉はそのまま、私の中にあります。

(明治大学政治経済学部)



2014年6月 県大 「東アジア研究」講義のあと。
「須坂屋」にて。左から権、山内、木佐木。